

特集 国立病院総合医学会セッション “若手医師フォーラム”



口演発表「症例報告部門」最優秀賞 × Dr. Yukiko Uno

Ultrasound-Guided Lateral Femoral Cutaneous Nerve Block for Meralgia Paresthetica: A Case Report

熊本医療センター 臨床研修医（1年目）宇野 由希子 [指導医] 麻酔科部長 宮崎 直樹



国内で英語セッションができる NHOならではの貴重な機会

—— 応募のきっかけ

指導していただいている先生から、「英語によるセッションの機会があるので応募してみたら」と勧めていただいたことがきっかけです。英語が好きで、医師になってからもずっと英語を勉強していることもあり、これまでの勉強を活かせる良いチャンスだと思い応募しました。

—— テーマについて

抄録の提出時は麻酔科をローテーションしており、また、将来は麻酔科にも興味があったため、麻酔科における「超音波ガイド下大



腿外側皮神経ブロック」をテーマに発表しました。

立ったり歩いたりすると痛む外側大腿皮神経障害に対しては、神経ブロック療法によって患者さんのQOLを大きく改善することができます。手術とは異なり高齢患者さんでも治療を施すことができるということや、外側大腿皮神経障害という病気についても多くの人に知ってもらいたいという気持ちがあり、このテーマを選びました。

—— 準備で苦労したこと

オーディエンスには領域外の先生やコメディカルの方々もたくさんいらっしゃるため、専門用語をいかに英語で分かりやすく伝えるかに注意しました。細かいニュアンスを英語でどう分かりやすく表現したらいいのか、英語圏の生活経験がないノンネイティブな私にとっては非常に難しい課題であり、

苦労しました。また、口演発表の質疑応答もすべて英語で行われるため、英語による咄嗟の受け答えができるよう、準備の多くの時間を質疑応答の練習や、練習で答えられなかった想定質問に対する準備などに費やしました。

—— 発表や質疑応答を経験して

質疑応答では2つの質問をいただきました。一つは想定外の質問であったため、返答に少し詰まってしまいましたが、なんとか答えることができました。

反省点は多くありましたが、準備で苦労することもありましたが、そのなかでたくさんの知識を吸収することができましたし、英語力やプレゼン力の向上にもつながるなど、“若手医師フォーラム”は今後の大きな成長に向けて非常に有意義な経験となりました。



—— 他の発表者から学んだこと

みなさんの発表を見て、強調したい部分には動きのあるアニメーションを活用するなど、私はスライドづくりにもう少し工夫が必要だったかなと感じました。今後も発表する機会があると思うので、他の発表者のみなさんから学んだことをしっかり活かしていきたいと思っています。



PROFILE

出身地：熊本県
出身大学：群馬大学（2024年卒）
宝 物：実家の猫
座右の銘：なるようになる



—— 医師として大切にしていること

患者さんに寄り添った医療です。一人ひとりの患者さんに最適な治療を提供するには、患者さんに寄り添うことが重要であり、そのためにはコミュニケーションによって良好な信頼関係を築くことが大切です。普段の会話のなかで患者さんの変化に気づくこともあるため、積極的にコミュニケーションを取るように心がけています。

—— 将来の夢や目標について

大学院に進み、研究にも携わりたいです。海外でも研究をしたいですし、その研究を日本に持ち帰り、日本の医療に貢献することができたらと思っています。

—— アドバイスとメッセージ

初期研修医で、しかも国内で英語セッションができる“若手医師フォーラム”は、NHOならではの貴重な機会です。発表も質疑応答もすべて英語であるため、日本語よりも準備が大変で苦労すること多いと思いますが、その分、得られる知識や学びは非常に大きく、かけがえのない経験になるはずです。少しでも興味のある方は、ぜひ積極的に参加してほしいと思います。

“若手医師フォーラム”とは、NHOの若手医師を対象に、各自が取り組んできた症例や研究について、NHO等の多職種が一堂に会する国立病院総合医学会にて英語発表（質疑応答も英語）で行われるセッションです。最優秀賞の先生には副賞として国際学会への参加費用が補助されることとなっています。2024年10月18日（金）・19日（土）、グランキューブ大阪で開催された第78回国立病院総合医学会（テーマ：進化していく病院であるために～心理的安全性の高い組織づくり～）における、“若手医師フォーラム”の口演発表にて、最優秀賞に輝いた2人の先生に話を伺いました。



口演発表「臨床研究部門」最優秀賞 × Dr. Yosuke Fujimi

Brain lesions associated with HIV infection: A single-center surgical experience

大阪医療センター 脳神経外科 専攻医 藤見 洋佑 [指導医] 脳神経外科医長（副科長）浅井 克則



挑戦する価値が大きい英語セッション 他の発表者からも多くを学びました

—— 応募のきっかけ

私は小学生時代、3年間ほど海外に住んでいた経験があり、英語ができるということで脳神経外科の医局の先生に勧められたことがきっかけです。自分のなかで英語はあまり得意ではなく、悩みましたが、貴重な経験ができるということでチャレンジしました。

—— テーマについて

「HIV感染症に合併する脳病変に対する手術症例」について発表しました。

HIVなどの免疫不全症や白血病などの悪性腫瘍の患者さんは免疫



低下によって日和見感染症になりやすい特徴があります。HIV感染症に伴う日和見合併症は末期のイメージが強くあり、脳病変も昔はすぐに命を落としてしまうケースもありましたが、近年は多彩な病変に対する治療法が確立されており、最適な治療を行えば治る病気になっています。

—— 準備で苦労したこと

英語では準備に費やす時間が日本語の3倍くらいかかりました。また、スライドを見やすくするため、文字量をなるべく少なくして、話す量を多くした方がいいのか、

それともオーディエンスが話を聞き取れなかった場合、スライドの文字情報で補うことができるため、文字量を多くした方がいいのか、そのバランスが難しかったです。

—— 発表でこだわったこと

“若手医師フォーラム”が行われる国立病院総合医学会では、全国のNHOの医師だけではなく、メディカルの方々も参加されることもあり、専門的な用語を噛み砕いて、いかに分かりやすく伝えるかを強く意識しました。また、スライドにアニメーションを多く活用するなど、見やすさにもこだわりました。

—— 他の発表者から学んだこと

みなさん、質疑応答がしっかりできている印象を持ちました。研究発表の内容だけではなく、その研究に関連した知識やバックグラウンドにもみなさん詳しく、私も自分の研究発表テーマから幅を広げた知識やバックグラウンドを広げて研究していくことも重要だと感じました。

—— 英語での発表や質疑応答について

同じ脳神経外科医からの質問はある程度予測して質疑応答の練習をしていたのですが、他科の先生からの質問は想定できていませんでした。それに対する詳しい説明に加え、日本語だったら臨機応変に何とか対応もできますが、英語だと一度頭が真っ白になってしまいうとなかなか元に戻るのが大変で、難しかったです。



PROFILE

出身地：大阪府
出身大学：大阪大学（2020年卒）
宝 物：家族
座右の銘：練習は嘘をつかない

—— 医師として大切にしていること

患者さんファーストの医療です。自分がもし患者さんだったら、医師に何を望むのかを常に考えています。こういう状況だったら何をしてほしいのか、その患者さんの生活背景を考えた医療や、治療方針の説明も患者さんが理解できる言葉で話をするなど、常に患者さんファーストを心がけています。自分の周りにはそうした自分の理想とする医師像を体現した先生が多くいるため、いつも勉強になっています。



—— アドバイスとメッセージ

日本国内において英語で発表する機会は少なく、NHOの“若手医師フォーラム”での発表はすごく貴重な経験になりますし、今後、国際学会で発表したいと思っている人には絶好の機会だと思います。私は小学生時代、海外に住んでいた経験がありますが、正直、英語はあまり得意ではありません。英語での発表機会も久しぶりでしたが、発表する過程で英語論文を読んだり、英語文章を作成したりと、知識を得ると共に英語力も鍛えられるなど、挑戦した価値は非常に大きかったです。英語が苦手な方も、ぜひチャレンジしてほしいと思います。